

# 雛人形の歴史

## ●人形と「かたしろ」信仰

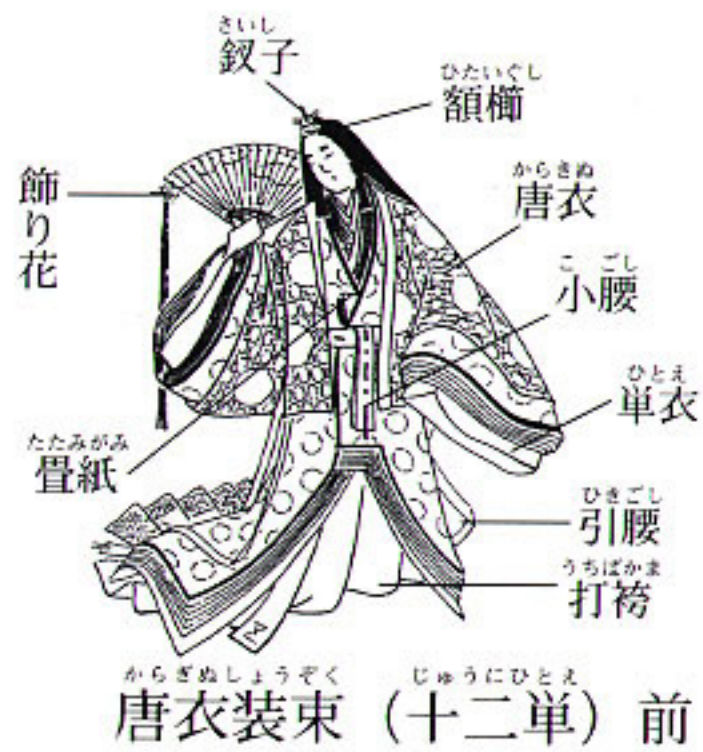
三月三日にお雛さまを飾るといふ風習は、日本独自のものです。では、このお雛祭りは、いつごろから、どんな形で行われてきたものでしょうか。

日本では古くから、川や海で身を洗い清めて、さらに紙を人の形に切り抜いた「ひとがた」で自分の体をなでて身のけがれや災いをそこに移し、それを自分の身代わりとして海や川に流すという「かたしろ」信仰によるお祓いが行われていました。

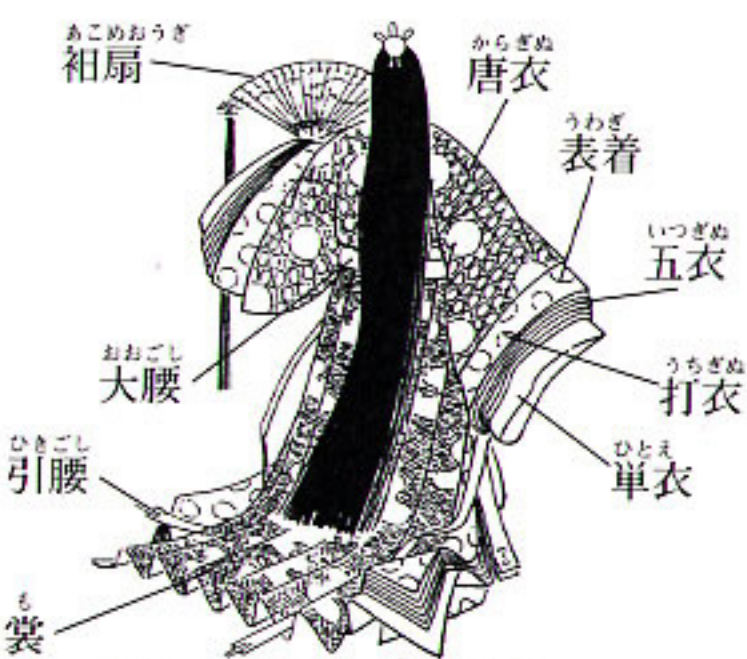
古代中国では、三月の上巳（三月の最初の巳の日）に水辺での春の禊が行われ、これが日本に伝えられて三月にお祓いをする

「ひいなあそび（雛遊び）」という人形遊びが行われていました。紙製の人形で遊ぶまごこのことを指すのですが、「小さく作られていてかわいいもの」という意味の「ひいな」からそう呼ばれるようになったようです。

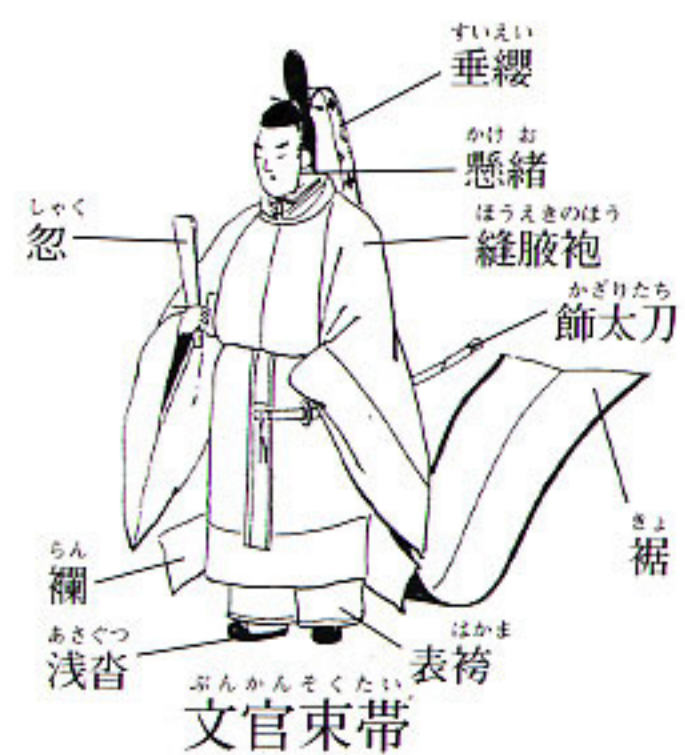
この人形遊びと、先ほど紹介した「かたしろ」の信仰、そして三月上巳の行事、さらには中国から伝わってきた節句信仰などが結び付いて、現在の雛祭りの原形ができて上がっていったと考えられています。



唐衣装束 (十二単) 前



唐衣装束 (十二単) 前



文官束帯

いう風習が広まっていきました。文献を見ると、平安時代、宮中では、三月にひとがたを使った禊が行われていた様子がうかがえます。当時は人形のことを「ひとがた」または「かたしろ」と呼んでいました。現在、鳥取地方で行われている「流し雛」は、「かたしろ」信仰の習慣を今に伝える行事です。この信仰から発生していったのが、幼児を守る「かたしろ」としての人形、「天児」（あまがつ）と「這子」（ほうこ）です。天児は平安時代の公家や上級武士の間で用いられたのに対し、這子は庶民の間に広まっています。

## ●雛人形の「ひな」とは

今まで紹介してきた信仰とは別に、平安時代、宮中や貴族の幼い女の子の間では

## ●雛祭りとは雛人形の誕生

人形は時代の流れとともに変化し、鎌倉時代には天児の形を引き継いだ「神雛」が登場します。紙を素材にしているため「紙雛」ともいいます。男女一対の形式で作られているため、おそらくこれが現在の雛の原形と考えられています。その後、この神雛に美しい模様を描いたり、髪の毛を植え、衣裳を着せたりと華美になっていき、そこから「立ち雛」と呼ばれる雛人形が生まれました。こうして天児が上流階級で鑑賞用